

セルフエンパワーメントとしてのボランティア活動

— 障害者・高齢者福祉ボランティアの体験を中心に —

教育学部教育実践総合センター助教授 鈴木庸裕

はじめに

ボランティア活動がその援助者のものの見方や考え方、感じ方の形成にどういった影響を及ぼすのか。そしてとくに障害者福祉や高齢者福祉のボランティア体験が青年の人間関係能力や自己の生き方の模索・発見に対して、いかなるエンパワーメントになるのか。本稿ではこうした点について学生アンケートと体験報告をもとに若干の考察をおこなう。

1. セルフエンパワーメント・ボランティアとは何か

(1) ボランティアがねらいとするもう1つの課題「働きかけるものが働きかけられる」。この実践哲学的テーゼはボランティア活動においても吟味する時代がやってきた。

ボランティア活動が誰のためのものかという問いはこれまで本格的に明確になされてきてはいない。これを問うこと自体、不見識とさえされてきた。自己犠牲が尊ばれる日本社会の土壌では、自分を大切にすることが推奨されにくい。ところがボランティア概念を支えてきた社会的人的要因や運営・機能的要因に大きな変貌がある今、援助者（提供者）のためのものという設定が必要になってきている。その理由は、ボランティア活動の客観性と社会参加の関連（社会的スキルの習得）が問われているからである。これまで、援助者から見たボランティアの意味づけが自発性ゆえに主観的なものであり、マクロには社会適応であった点にある。青年層においてボランティア活動が「偽善」や「自己満足」であるという認識は少なくない。未経験者にとってはその部分が自己の正当化につながっていることもある。一方、その批判的な認識に対する具体的に有効な方策がなされていない状況にある。サービス供給者主導とサービス利用者主導との「つなひき」において、供給者主導にあったボランティアでは、要援助者の尊厳や適切な資源の供給による要援助者の成

長への信頼という問題が希薄となる。一方、利用者主導では要援助者の可能性を空想化しかねない。援助者と要援助者がともにつくりあげるボランティア世界をうみだしていくうえでも、供給者側の主体性とボランティアスキルの向上の基盤となる、供給者側にとっての活動的意味を明確にしなければならない。

そこで提起するのがボランティアのリアクションに着目したセルフエンパワーメント・ボランティアの概念である。この定義は、援助者の動機づけと要援助者から援助者へのエンパワーの営みの総称であり、相互援助自立の根拠を問題化するものである。しかもこの問題化の中に援助者のエンパワーメントの契機と筋道とを探るものである。そのため「自己実現」とは区別される。

ではボランティアがどう援助者自身のエンパワーメントにつながるのか。ボランティアとは voluntas「自由意志」、volonte「喜びの精神」を語源としており、volunteer「奉仕者・自ら進んで提供」である。そのため、社会生活における自由や安心、やすらぎ、喜びを通じたエンパワーメントの基礎を増していくものである。同時にこのエンパワーメントは青年にとっての権利であるという確証である。このことは、生活の私事化にあってボランティアの非日常性による「場所の移動」—自己の生活ストーリーの土台を置き換えてみえてくるものから生じてくる。現実には、障害者福祉や高齢者福祉において障害者や高齢者が援助者へのボランティア主体となっている場合が少なくない。セラピー・ボランティアとして訪問先の独居老人との関わりから学校で問題を抱える生徒が変革していく様子など、数多くの例が報告されている。これは社会的弱者への見方を例にとると、福祉や奉仕、援助の対象として弱いものととらえるのではなく、その中にある「強いもの」を引き出す手伝いをするという立場によるものである。

こうした視点は、第1にボランティアのもつ学習権保障の意味（国民としての福祉的教養の形成）につい

で考える出発点であり、第2に、高齢者の社会参加や障害児者の社会参加と自立というテーマを考える上での基盤となる。

(2) セルフエンパワーメント・ボランティアの構造
エンパワーメントとは日常、「回復力」「自己決定のちから」「元気づけ」と表現されることが多い。本来は社会的な不平等な立場にある人がさまざまな力を獲得するために諸資源を得ることである。生活の向上のために奪われていた力を取り戻していく上で、ミクロレベルでは個の自己実現、マクロレベルでは政治的参加というように、個人、グループ、コミュニティの利益を代表したり、弁護したり、介入・サポート、あるいはあるべき行動を推薦したり、アドボカシーの中で論じられる概念である。

ロロ・メイによればパワーに5つの分類ができるという¹⁾。搾取的なもの、操作的なもの、競争的なもの、保護的なもの、統合的なもので、これらのうち、搾取的なもの、操作的なもの、保護的なものは二者の力関係に対等がない場合で、競争的なものと統合的なものには対等さがある。日本社会においてはこの競争的な力には、マイノリティを差別構造の中でとらえる意識が根強いので、本来の意味での対等さは維持されていないが、統合的な力には対等な立場にある者同士がより強くなるために協力し合うことに同意してできあがったものである。また、エンパワーメントは個人的、あるいは社会的なちからを増すためのプロセスとして、「資源の不足している人がそれらの資源に近づきやすく、同時にその資源にたいする統制力を持つことをめざした意図的なプロセス」²⁾ だといえる。したがって、援助者においても自己の課題を発見するための統合的ソーシャルサポートという意味から、被援助者との接点に生まれる社会的スキルの向上は援助者のセルフエンパワーに他ならない。

青年自身がケアの対象になっているという現状認識にはいくつかの視点がある。それは生き方のオルタナティブの弱まり、自尊感情の喪失、ミーイズム、三無あるいは五無主義、あるいはカプセル人間と称されてきた青年の自己肯定感の弱まりである。これらを社会的要因に解消することは個の内発的成長をゆがめてしまい、他方個人的要因(気質や生い立ち)に解消することは問題を個人責任に押しつけるのみとなる。これらは同様の間違いを含んでいる。すでに述べたように、今日求められるのは青年が自己を尊重し自信を高める

知識や技術の習得である。これは青年のみならず、子どもたちの状況に例示するのに枚挙のいとまがない。

したがって、セルフエンパワーメント・ボランティアとは、ケアの提供者そのものが要援助者であると理解し、援助者自信のケアを自覚化したボランティアのプロセスである。ケア・ワーカーなどに見られる生活自立支援の領域における非専門家とは一定区別する必要があるものの、ある行動をおこした状況にいた他者からのフィードバックを第一義とする。

以上のことから、セルフエンパワーメント・ボランティアの構造は、要援助者との出会いからはじまる営みによって、援助者が問題の存在を発見するプロセスに存在するということがその前提となる。

自己受容—自己イメージの確認
自信の創出—自立主体としての確認
社会的スキルの形成—問題解決に必要なちからの獲得
社会参加—被援助者主導モデルへの参加

なお本稿では、とくに要援助者の代弁までをおこなない、社会的資源の確保や開発まで視野に入れて取り組む人材の専門性とその中間の人材として問題と解決をつなぐものを育てる場合に、後者にこのボランティアのウエイトが占められてくると考える。つまりエンパワーメント概念についてもアドボカシー能力の高まりとの結びつきで考えている。

(3) 「気軽さ」の意味

福島県のボランティア活動振興指針中間報告において「ボランティア活動振興の基本目標」では、以下のように示している³⁾。

- 1 気軽に参加できるように(きっかけづくり)
- 2 活動しやすく(条件づくり)
- 3 地域社会に根づくように(しくみづくり)

全国的に多くの施策がさまざまな環境整備面の充実に力点を置いている⁴⁾。しかし上記1の面が参加者のモチベーションの部分に対応する形でいっそう追求される必要がある。短時間で簡単に活動ができる。そして友達と一緒にできるということが重要な条件になっていることはいくつかの調査から論じられているが、その1つ震災ボランティアでの調査によると、「活動に参加してよかった点として考え方が変わった」「人に役立った」「社会問題への理解」とりわけ学生を見

ると「友達ができた」の項目が他の職種や世代と大きく開いている⁵⁾。後でも触れるが、青年の多くがボランティア活動の「気軽さ」や活動のしやすさを要求している。この気軽さとは片手間やいつでもどこでもというものではなく、自己の意識選択の際に持つ「ハードル」の低さを指し示している。福島県社会福祉協議会の第6回サマーショートボランティアスクール報告書「夏体験」(1996年度版)によれば、参加動機は半数が「自分のためになるから」と答え、12%~19%が高齢者福祉や障害者福祉に関心があるからと答えている⁶⁾。これは大学生を含め学校在籍者に多い回答であり、一緒に参加する友人の有無を大きく意識している。このように「気軽さ」のもつ積極面(対人関係上での)には着目すべきであり、「力になりたいがどう働きかけていいのかわからない」という風潮は、自己の成長と周囲のボランティア参加に対する理解や共感の必要性をわずかであるがうかがえることは見逃せない。

ところで、ボランティア活動をめぐる青年向けの諸施策のうち、例えば、教員養成系学部「介護等体験」の特例法や現職教員のボランティア体験、進学、就職の際のボランティア体験の奨励、あるいは企業や事業所での勤務内外での活動を見ると、この多くが社会参加・社会貢献型のボランティア推進であることがわかる。公的支援制度の不備をボランティアで埋めあわせをする発想には批判的でありつつも、こうしたボランティア活動の姿を通じて現れる人間像をつかむという点では例えば面接・資料等での意味がある。ただ、そうした利活用や選考者被選考者双方の認識のズレを是正する上でまだ成熟した社会システムとは言えない。ここには受け入れの体制がもつ動機づけ部分の課題がある。

2. ボランティア体験へのプロセスの中で

(1) 学生のボランティア体験

そこで、1997年5月に筆者が担当する「教育実践学I」(前期2年生が中心)においておこなったアンケート及びレポートをもとに学生たちの実態や意識を検討することにする。

男子学生30名、女子学生91名合計121名に対して、ボランティア活動への興味関心の有無、これまでの体験と現在の活動、ボランティア活動へのイメージ、活動をする上での障害と思われる事柄、希望する場所・施設、教職にとっての有用性、そしてボランティア活

動への認識や課題意識について自由記述による回答を得た。この講義は教職科目の内での選択必修であり当初より福祉教育・ボランティア活動論のみを扱う特定のテーマ設定ではないことから、一定十分な動機をもって学生たちが履修したものではないことをつけ加えていく。結果の概略は以下の通りである。

<ボランティア活動に興味関心があるか>の問いでは、「はい」108名(89.3%)、「いいえ」13名(10.7%)。<これまでの経験>は、小学校時代では「ある」40名(33.1%)、「なし」81名(66.9%)、内容は老人ホーム訪問、募金活動、古切手、JRC活動、福祉少年団、コスモス活動などとなっている。中学校時代では「ある」39名(32.2%)、「なし」82名(67.8%)、内容は駅前清掃、学区・地域の清掃、JRC活動、保育所の手伝い、募金活動(ユニセフ、街頭、赤い羽根)、老人ホーム慰問、養護学校との交流、障害者施設訪問、手作りゴミ箱設置、おはよう活動、資源回収、保育所訪問、診療所の職場体験など。高校時代では「ある」27名(22.3%)、「なし」94名(77.7%)で、内容は障害児の保育園の清掃、聾唖者との手話交流、知的障害者との交流会、特養老へのイベント参加、老人ホーム訪問、川の清掃、サマーボランティア(共同作業所)、阪神大震災募金(文化祭でのクラス活動)、JRC活動、青年の家施設ボランティア、地区ボランティア推進委員など。現在大学に入ってからでは「ある」22名(18.2%)、「なし」99名(81.8%)で、内容はふれあい公演(コーラス)、手話サークル、リハビリ介護、ダウン症児との遊び介助、献血、子ども向け演劇活動、知的障害施設訪問、盲学校訪問、児童文化研究会、老人介護などであった。

全体の55名(45%)の学生が小学校から現在に至るまでいずれにおいても「ない」と回答しており、年齢が進むにつれて活動の減少が顕著である。活動の内容の選択をやや狭くイメージした結果や記憶の薄れによるかもしれないが、献血のような性格のものを除くと5割近くが未経験となる。

<ボランティア活動についてのイメージで、あなたが感じるものを3つ選べ(複数回答)>では、

1. 高齢者や障害者への援助活動 89名(73.6%)
2. 無償でおこなう奉仕活動 89名(73.6%)
3. 自分的人性を豊かにすることができる活動 37名(30.6%)
4. 自分の充実感や満足感を得ることができる活動 21名(17.4%)

5. 世の中や人のためにする活動	47名 (38.8%)	4名 (3.3%)
6. 自分の経験や知識・技能を活かすことができる活動	11名 (9.1%)	12. 就職に有利な活動 4名 (3.3%)
7. 使命感をともしやりのある活動	3名 (2.5%)	13. その他 7名 (5.8%)
8. 大きな災害などへの救援	37名 (30.6%)	ここでは高齢者や障害者への援助や無償性が際立ち、次に自己実現要求、自己有用性、そして災害救援となっている。これは全国的な調査の結果とほぼ合致している ¹⁾ 。
9. 自己犠牲による奉仕活動	4名 (3.3%)	<今、ボランティア活動をするにあたって障害となものの順位>は下表の通りである。
10. 気楽にできる活動	8名 (6.6%)	
11. 経験や知識理解がないとできない活動		

	第 1 位	第 2 位	第 3 位
1. 機会・情報がない	43名 (35.5%)	32名 (26.4%)	14名 (11.6%)
2. アルバイトなどで忙しい	29名 (24.0%)	30名 (24.8%)	11名 (9.1%)
3. 家族の理解がない	0名 (0%)	1名 (0.8%)	2名 (1.7%)
4. 個人的に興味がない	5名 (4.1%)	3名 (2.5%)	0名 (0%)
5. 一緒にやる友達がいない	1名 (0.8%)	8名 (6.6%)	17名 (14.0%)
6. やる勇気がない	13名 (10.7%)	20名 (16.5%)	18名 (14.9%)
7. 遊ぶ時間が減る	6名 (5.0%)	7名 (5.8%)	10名 (8.3%)
8. 偽善的に見られる	6名 (5.0%)	7名 (5.8%)	11名 (9.1%)
9. やってもメリットがない	0名 (0%)	1名 (0.8%)	2名 (1.7%)
10. 特に障害はない	11名 (9.1%)	3名 (2.5%)	18名 (14.9%)
11. その他	6名 (5.0%)	1名 (0.8%)	3名 (2.5%)
不明	1名 (0.8%)	8名 (6.6%)	15名 (12.4%)

ボランティア活動をする上で障害となる理由として、回答3つに順位づけをしてみると、機会や情報、時間(アルバイトで)の無さに理由がある。ボランティア活動への一歩という勇気のない理由はどの順位にも比較的に見られるが、「一緒にやる友達がいない」というアクティブさに関する理由が後順になると浮き上がってくる様子が分かる。

<もしボランティア活動をするにすればどのような場所がいいか>では、順に並べると児童館・学童保育29名(24.0%)、老人ホーム15名(12.4%)、養護施設14名(11.6%)、身体障害児者の施設13名(10.7%)、知的障害児者の施設11名(9.1%)、乳幼児施設9名(7.4%)、保育所9名(7.4%)、スポーツレクリエーション施設8名(6.6%)、子ども会7名(5.8%)、その他6名(5.0%)となる。

<将来就職をめざすものとしてボランティアに関する学習は必要と思うか>では、「大いにそう思う」68名(56.2%)、「少しそう思う」43名(35.5%)、「あまり思わない」8名(6.6%)、「まったく思わない」0名(0%)、「わからない」2名(1.7%)と、概ね自

分で受け止めている傾向がうかがえる。

(2) エンパワメントの所在

自由記述の傾向では、「積極的評価」(批判的であれ自分や社会の現状について意見を表明したもの)は77名(63.6%)、「消極的評価」(無関心を表明するもの)は13名(10.7%)、「わからない」が5名(4.1%)、「記述なし」が26名(21.5%)で、それらの分析するとエンパワー要求にいくつかの傾向が見えてくる。

第1に、自己イメージへのエンパワーである。

「ボランティア活動をすることによるメリットを考えてしまうことが問題だ。高校の時ボランティア活動に参加して、もしかしたらただ自己満足や偽善ではないかということです。」「本当にやりたくてやっているのかという疑問を持つことがある(点数かせぎ)。」

「私が想像するときは自分の点数かせぎ的イメージになってしまう。阪神の震災におくる募金集めをしたときも『これで〇〇点アップしたね』などと言いつつ。私たちは本当の意味でボランティアというものを知らないのかもしれない。」「大学入試という局面が記憶に新しい学生にとって、入試のためにという友達の

様子と進学進路との峻別がつきにくいままにしている」。このように、偽善的である、自己満足であるというボランティアへのイメージは社会的弱者への認識をゆがめること以上に、自己イメージと表裏の関係にある。「偏見と無知の克服かなあとと思う」という漠然とした印象を持つ学生もいるが、「自己満足や偽善の感じがする。この考えを恥だとは思わない。無償の行為というより、金銭的なお返しを望む。その方が割り切りやすいから」という意見もある。これらを見ると、自分に自信が持てない部分を示しており、「学校への受験や採用試験のためにやるというイメージがぬぐい去れない。この活動で有利になるという社会の傾向が問題」という意識も自己イメージの転換を図らないままの状況だと言える。「ボランティアという言葉が身近な言葉に感じられない。忙しかったからというのも変で、忙しいというのが理由になるのはおかしい」という意見は学生相互には厳しいものだが、自己イメージを検討する上で重要な指摘である（価値へのサポート）。もっとも、青年にとってボランティア活動がイメージできていないのは自己の直接体験から類推できない場合も少なくないが、既成の枠組みを強く自己内面化している結果かもしれない。

第2に、対人スキルへのエンパワーである。まず2種類の意見から見てみたい。1つは「ボランティア活動という自主的におこなう活動と考えているが、やや強制的に学校などでおこなわれてきたように思う。もっと気軽に活動できる必要がある」というもの。2つめは「ボランティアという本人の自発性によるものというプレッシャーがあって、もしうまくやれなかったらなどと考え、しりごみしてしまう。それに一度やったら続けなければならないという義務感がある。自然にボランティア活動に参加できる知識と技能を身につけたい」というもの。先にも述べたが、「気楽に参加できる」という表現は、学生の回答に目立つが、2つめの意見が示す印象が本音かもしれない。すなわち、気軽に関わる他者とのつながりでの対人スキルの習得—交わり能力・コミュニケーション能力・協同的能力の問題である。「障害者の立場がわかるようになりたい。私のアルバイト先の会社で目の不自由な人が働いている。今まで直接話をしたことがなかったので最初話すことさえ抵抗があったが、話したら普通の人だった」は単に話しかける勇氣や気負いを取り去る行為ではない。これは、情報の入手方法についても同様である。「活動に参加しなかったが、どのような方

法で参加して良いかわからなかった。もっと宣伝して多くの人に参加しやすい状況をつくるべきだ」。アンケートでも情報の入手不足を理由とする回答が多かったが、情報が少ないということはその入手経路自身の少なさであり、とりわけ学生当事者の生活スタイルにおいて目に触れなかったり見過ごしやすい状況にあるといえる。しかし、「情報を得るのにも自己努力がいと考える」ということも大切であるが、情報を入手する時点での「気軽さ」の追求が情報サポートとして不可欠となる。

第3に自己実現へのエンパワーである。

「ボランティアは人のためにやるというのではなく、自分のためになるからやるものだ。ボランティアをすることによってその人が大きく成長できるということは言うまでもない」。その一方で「人に何かをしてあげて感謝されるというものではない。(中略)結果が自分のためなら動機・目的が自分のためであってもいいのではないだろうか。自分がいまそのようなことをすることで何かに気づきたいと思う時にすべきだ」。これらには自己を発見する糸口としてのボランティア観を感じる。しかし、「今あまり知識もないままにボランティアに参加しています。相手に対して申し訳ないなあと思う反面、自分を必要としてくれるし自分の勉強という思いもあるし、はっきりした意志があるのではないのですが、もう少し自分の考えをはっきりさせたいと思います」というように、自己学習とのつながりで考えはじめる学生もいる。ただ「実際に障害者と接していて、私は障害者と接したいからしているのであってボランティアという意識はない」という意見がある。こうした思いにいるものへのサポートが今後大切になる。

第4に社会分析能力へのエンパワーである。

「ボランティアという『3K』にあたる部分ばかりが宣伝されているように思う」。「行政のひずみの穴埋め的存在になっているというイメージが強いので『いいように扱われている』という雰囲気反発と反感を感じる」。「自分たちの生活に結びついていないように感じる。生活とボランティアの関係が問われているように思う。機会を与えられなければボランティアをしようとは思わないところに問題がある」。「ボランティアを受ける側の意識とのずれは国家予算など構造的な問題ではないか」。他方「ボランティア活動をもっと義務化すべきである」という意見も少なくない。「相手に対して単なる手助けでは相手のためにならない

い。」「自分が自立していくためにどうしたらいいかということを考えることが必要」。表現は異なるが、「老人ホームでボランティアをしていて聞き分けのいい老人をいっぱい作りだしているような感じがしました」という体験を述べる学生もいる。これが、自由記述での感想群から見た学生の意識像である。

(3) 疑似体験を通じて

当初のこうした意識に対して、講義では疑似体験（白杖とアイマスクの使用）をおこなった。福島市社会福祉協議会より借用した白杖とアイマスクで大学構内での疑似体験を実施し、受講学生が多いことから2回にわたっておこなった。その時、この体験を学生たちはどうくぐったのかについて述べる。視覚障害と日常生活に関わるこの体験は、初体験である学生の多さもあるが、恐怖にも似た驚きがあった。大学構内での実地体験という制約はあるが、講義棟や図書館、学生食堂、売店、近くの駅などに移動しながらの「気づき」について以下、概略する。

アイマスクを付けた瞬間から頼りは杖と先導者だけであったが、時間がたつにつれて慣れてくると、周りの人の声や音が聞こえてくるようになってきた。こうした感覚になるにつれて、環境を整えば不自由さもかなりの部分で克服することができるという点、耳で聞いたり触れたりいろいろな方法で不自由さを補うことができるという点、点字ブロックの上を歩いた学生は、日頃気にしていなかった社会的環境に気づくことができたという点が感想に目立つ。

実際には障害を感じない（日頃目が見えている）状態からの変化であるため、疑似としての体験域を越えるものではないが、気づかなかった視覚以外の感覚に、つまり自分の身体への気づきや安心感を感じる学生が多い。また手引きする先導者との呼吸や他者への信頼、他方、相手を支える（支援する）行為の実際場面で自分の相手への伝達・コミュニケーション能力について考える機会となったという学生が多く見られた。同情とも言える障害者への意識が、自己の身体を通じて結びつくことで同情から共感ないし同行者への意識に一時的になれたことが体験の重要な意味であったという学生が際立つ。

もう一方で、階段やスロープのない段差、フルフラットでない建物の構造、エレベーターの仕様など物的環境の不備を訴える場合もあるが、逆に思いがけない部分に人間の自立を促したり補う事例があることに気

づいたようである。視覚障害の人々が安全に安心して暮らせる社会という抽象的理想的な認識がこの体験を通じて人間の自立支援の具体的な方法技術の習得へとつながること、そして同時にその方法技術が自らの手でもなし得ることを感じていった。人々が住みよい社会について、視覚の視点から少し社会改善へのイメージ化がなされたといえる。なによりも視覚障害者の身体的障害だけでなく、生活や就職など社会的ハンデューキャップについて理解はしているものの、その事実と自分との接点をこうした体験が生み出しているという点では、学生たちへの体験学習としての意味があった。

(4) 障害者・高齢者福祉ボランティア体験

受講生のうち、夏休み等を利用して約半数の学生がなんらかのボランティア活動に参加した。その内訳は以下の通り。

老人保健施設（病院デイケア、デイサービスセンター、特別養護老人ホーム、等）22名、障害者授産施設等6名、障害等をもつ子ども支援（身障者センター、病院外来、自閉症児のための地域サークル等）15名、養護施設2名、地域子ども（子育て支援）事業等22名。

ここでは講義に招いた実地指導講師からの紹介や担当教員からアドバイスをもとに、学生みずから県ないし市町村社会福祉協議会の窓口、あるいは直接施設等に連絡を取る方法でおこなった。中には現在、大学や地域のサークル活動で継続的に参加しているものも1割近くいた。体験に参加したものの多くは社会福祉協議会を経由している。

事前事後指導については一例として老人施設のものを紹介する。

9：30 活動先の施設に集合

開校式・オリエンテーション（日程説明、活動時の諸注意、事前アンケート）、担当：ボランティアセンター職員

9：50 施設概況説明、自己紹介（施設長挨拶、概況説明・案内、自己紹介一学校・学年・参加動機）、担当：施設職員

10：30 ビデオ学習（「手をつなぐなま」「みんなのしあわせ」）担当：ボランティアセンター職員・施設職員

11：30 食堂への移動、ベットの介助、食事の準備（エプロン、配膳、お茶）、食事介助、担当施設

職員

- 12:00 昼食と休憩
 13:00 老人との交流 余暇活動への補助, 老人との対話, 担当: 施設職員
 15:00 反省会 活動を通しての感想

2日目以降, 実践活動をはさんでミーティングと反省会を繰り返して, 1日型から長いもので4-5日の日程で活動プログラムが組まれている。中には高齢者疑似体験や福祉器具利用セミナーなどを加えたり, 体験の感想発表会に多くの時間をかけたりタイプは様々である。

＜学生たちの体験報告から(抜粋)＞

「障害を持つ人は社会が守る存在であって社会に貢献しないものと思っていないだろうか。その原因に小さい頃から障害者に接してこなかったことがあるように思った。地域社会で受け入れずに拒絶しておきながら, 学校は障害を持つ人を受け入れなさいと言う状況に気が付いた。精神薄弱者の言葉に冷たさを感じた。ボランティアとは施設に行って手伝うことではなく, 当たり前的事をやっていればいいのだということがわかった。」(M・S)

「知的障害者の更正施設で仲間とモーターのコイル巻きをして頑張りましたよねといったら『お仕事です』とと言い換えされた。何度も仲間に教えられての作業でした。(中略)自分に誇りを持って生きられるようにする手助けというのがボランティアであるということがわかった。」(Y・Y)

「一度の勇気でこんなにも得ることがたくさんあるのならこれからはもっと積極的にボランティアに参加したいと思う。」(Y・Y)

「ボランティアに参加するまで, 私はボランティアとは報酬を受けとらないだけのアルバイトと同じ事だと思っていました。しかし, 実際に体験してみて, 報酬を受けない代わりに得られるものの大きさを知りました。私が経験で得たものは, 実際の仕事の大変さに加えて, 『ありがとう』と言われることの喜び, 人に認められることの喜びでした。この経験をもとに今後もボランティア活動をしていきたいと思えます。」(K・E)

「最後に, お別れするときあるお年寄りの方から『何も言っておあげられないけど悔いのない人生を精一杯生きなさい』と言われた。そのとき涙が出そうだった。

素晴らしい言葉をかけてもらって良かったと思う。」(A・T)

「私のいったデイサービスセンターで強烈に印象に残ったのは, 所長とそこの職員の方々がまったく対等であることだった。お互いが対等でみんなが自分の意見を出し合っていていい話し合いがもてていたのととてもいい職場だと思った。」(I・Y)

「私たちがボランティアにいった中でとてもうれしかったことがある。手遊びをしているとき, K先生が出会ってから一度も顔の表情がなかったおばあさんが少しの時間だったが笑みを浮かべた。その時, 先生や看護婦さんがびっくりして何を言って良いのかかわからない表情と興奮。若い人のちからがすごいですよ。『今日おばあちゃんに表情が出たのは若い人が来ている元気の雰囲気伝わったからですよ』といわれた。自分が役に立つと言うことを実感した。」(Y・M)

「車椅子による移動やおしめの取り替えをしているときに障害を持った仲間にとりこりとしてもらった。有り難うという表情がとても我が身にしみました。はじめて本格的なボランティア活動を通じて, 無報酬でやっているんだという意識がなくなっていったことに驚いた。どうも一緒に楽しもうと思いはじめたことがこのような気持ちになれたのだとおもう。人のためにやるので, 自分の為という思いでいっぱいになった。」(F・M)

「軽作業を手伝いながら障害を持った人の介助にあたったが, 職員に教えてもらった介助技術の1つ1つに人間に対する暖かさを感じた。日頃, 自分が気づかない技のようなもの, 家族や友達関係においてもこれまで学んでこれなかったものを多く気づくことができた。」(N・S)

「障害者の在宅か施設かということを考えながらの体験でした。施設のもつ専門性の大切さと共に, 地域や社会で, あの人たちが何不自由なく過ごせる条件を整備する細かい事柄が見えてきた。とくに, 移動と情報について, 地域全体で考えていかないといけないと思った。」(I・H)

4. 援助者へのボランティアマネジメントの展開

(1) ボランティア体験のとらえ方

上述の体験報告は代表的なものを列記したが, 学生たちは「自分のために」という感情を多くで沸き上がらせている。そこには個人の「癒やし」ともいえる感

情をもとにしたものもあるが、はればれとした印象をもとにしめくくっているものが多い。初めての体験、そして非日常的な体験ゆえに活動を終えた学生の思いは、一つの自信を生み出している。それは、施設や被援助者が自己の肯定感情を映し出す鏡という存在になって、学生たちの前に立ち現れたためであろう。そこには施設での職員から受けたアドバイスもあるが職員の自然体としての援助行為に触れたという点もある。そして職場・施設内の職員間の人間関係（チームワークや連携コミュニケーション、協同）の場面に触れたことが大きな気づきとなっている。学生たちが当初気負って施設の門をくぐる姿勢の裏側に不安な自己の存在があるのかもしれない。

(2) 被援助者主導モデルへの実践的参加に向けて

こうした体験は、次の点でエンパワーメントの内実を示していると思われる。

- 癒やされるということが人間社会の諸問題を浮き彫りしていること。
- 自立生活への支援志向が自己の生活変革の糸口になること。
- 介助技術の習得がアドボケート機能の発展につながること。

では、こうした部分を展開する上で、今後、被援助者主導の社会福祉環境に援助者がどのように参加（インクルージョン）するのが問われる。この問題についてボランティアマネジメントの視点から課題を少し述べておきたい。

学生の感想等からもわかるように、どのような能力が導かれるのかという点で、体験カリキュラムの教育過程化がボランティアマネジメント機能の中で重要な位置を占めるという問題がある。なぜなら、学生たちのボランティア体験の過程には、1)「自分でも役に立つんだ」「自分にも問題を解決するちからがあるんだ」ということに気づくことや2) 福祉的な問題や課題を共有する他者（要援助者、施設職員等）との出会いと交流、そして3) 体験を通じた課題克服のための行為選択という3つの段階が見られる。その中で、個人のもつ身体的特徴と結びついた機能上の制限や困難あるいは社会的不利をもつ障害者や高齢者がかかえる問題を、個々人が自己の課題へと高めていき、そのための問題の発見を他者との共同化による課題の発見へと結びつける機能が必要になる。ここにボランティアの組織化やカリキュラム化を模索するマネーメン

トの着眼点がある。

ボランティア活動が非日常から日常に移行しつつある今日、ボランティアを通じた社会的対人スキルの技法やそのためのプログラム開発は早急の課題になってくる。

その際、本稿で述べた援助者側の自己現実や自己表現の能力について明確な位置づけが必要になる。社会と個人、公と私という2項的ないし直線的なライフスタイルの改編に対して、中間的な生活圏を芽生えさせていくためにボランティアの世界がある。しかし、あくまでもボランティア活動はその1つの切り口であると理解するべきであろう。

謝辞：本論執筆にあたり、関靖男氏（福島県共同募金会主任・前福島県社会福祉協議会ボランティアコーディネーター）をはじめ、県社会福祉協議会ならびに各市町村社会福祉協議会、お世話になった施設に御礼申し上げます。

<注>

- (1) Roro, May. Power and Innocence. (1976) W. W. Norton. P. 56 - P. 60.
- (2) Allen, J. Barr, D. Cochran, M. Greene, J., & Dean, C. (1989). Networking Bulletin : Empowerment and Family Suppr. (1 - 1) Cornell University. p. 20.
- (3) 福島県社会福祉協議会「ボランティア活動振興指針中間報告」ふくしま、ふくしボランティア21振興会議（福島県社会福祉協議会）1997年3月
- (4) 神奈川県社会福祉審議会「県民の福祉活動に対する支援のあり方について（答申）」1994年他、山形県福祉ボランティア活動推進委員会「ボランティア活動の推進に向けて」1995年、奈良県「ボランティア等社会参加活動推進のための基本方針」1994年、群馬県「ボランティア等社会参加活動推進の指針」1992年等を参照した。
- (5) 大阪市立大学社会福祉学研究室（秋山智久代表）「震災とボランティア」大阪府社会福祉協議会1995年、P. 38
- (6) 「夏体験 - 第6回サマーショートボランティアスクール報告書」福島県社会福祉協議会、1997年3月、p. 12
- (7) 経済企画庁『国民生活選好度調査』1993年参照。